

成都市内に出土した天王像についての一考察

馬歌陽

早稲田大学

二〇一四年に四川省成都市内の下同仁路で、単体の如来像、菩薩像、天王像、大きな蓮弁形の光背をもついわゆる背屏式造像など、一連の仏像が合計七〇件出土した。造像銘文を有するものによって、南朝の梁から唐にかけて造られたものと推定できる。この新出土の仏教造像は、四川地域の仏教美術のみならず、数少ない南朝造像の研究にとっても大変貴重な作例といえよう。なかには新様式と新題材を表した作例も含まれており、二件の独尊の天王像はその中の一つである。

本発表は、新たに出土した天王像と、以前同じ成都市内で出土した南朝仏教造像に表された天王像をめぐって論ずるものである。中国における天王の図像については、早くは甘肅省の石窟や雲崗石窟などの五胡十六国・北魏期の作例に遡ることができる。いずれも主尊の隣に配し、立った姿勢をとる多体尊像の一部分として表されたが、成都の出土例には群像の一部分だけではなく、独尊像の天王像もみられる。とりわけ、着装している特徴ある鎧は他地域には見出せない。では、こうした図像的な特徴をどのように解釈するべきか。

発表者は、先述した特徴に注目し、中国内地及び西域の類似作例と比較研究を行い、成都で出土した天王像が様々な要素を受け入れ、当地に形成された独自の尊像であったという可能性を示したい。さらに、文献資料を用いて当時における益州地区の天王像に対する信仰の形態を検討したい。